経済学がもっと面白くなる〈情報＆メッセージ!〉

北海学園大学 経済学部報
【エコン】
2010.冬・春号

econ.

No.21

日常から世界を視る、そして考える。

特集「夕張の声を聞く」

- ●座談会－夕張再生市民アンケート調査に参加して
- ●夕張問題ABC

news 1　2009年度 地域研修報告会

特別講演会
1「アジア経済統合と日本の EPA 戦略」
2「ニセコは、ひとつ！」
3「市民がつくるグリーンニューディール」
4「先住民族女性からみたグアテマラの現在」

interview　OB訪問－働きマン❹ハセガワストア 佐藤邦夫さん

連載企画　私の履歴書 内田和浩教授

news 2　プレゼン大会／インゼミ in 関西大学／就職情報

石炭ストーブ　（夕張市石炭博物館蔵）

現在では室内暖房と言えば、灯油・ガス・電気を使用したストーブや集中暖房が大半であるが、1890 年代以降、エネルギー資源として夕張など北海道各地で炭鉱開発が盛んになり、一般家庭でもそれまでの薪ストーブから石炭ストーブへと暖房器具が移り変わっていった。「econ.」今号特集の夕張市などの道内産炭地は、国のエネルギー政策を担い、経済的、文化的にも隆盛の一時代を築いていった。本学でも、現在のサークル棟ができる 1983 年頃までの旧サークル棟の部室暖房には石炭ストーブが使われ（＊写真：1980 年卒業アルバムより）、現在図書館のあるあたりには石炭庫があり、バケツに石炭を入れ、運ぶ学生の姿がよく見られた。（撮影協力：夕張地域史研究資料調査室）

特集「夕張の声を聞く」

座談会　夕張再生市民アンケート調査に参加して

8月17日から23日まで、本学経済学部生・教職員あわせて約30名と市民団体が合同で行った夕張再生市民アンケート実行委員会の調査報告は、夕張市への提出にとどまらずさまざまな方面から反響を呼んだ。この調査に参加した川村雅則准教授と学生の皆さんにecon.編集員の西村宣彦准教授をまじえて、この調査の現地での1週間を語ってもらった。

西村：昨年度（2008年度）は、川村、河西、西村の3ゼミ合同の地域研修として、夕張で調査を実施しました。今年度（2009年度）は、川村先生が中心になって地域研修の枠を超えて調査を実施されたわけですが、今回の調査の狙いを聞かせて下さい。学生の皆さんには参加のきっかけを聞かせてほしいと思います。

経済学部
西村 宣彦准教授

川村：今回の取り組みには幾つかの目的がありました。最大の目的は、夕張市民のみなさんの暮らしの実態や再生に向けた声を明らかにして、それを再生計画に反映させていくこと。ですから、いいかげんな研究はできません。夕張への地域貢献という目的もありました。そして、みなさんたち学生の成長という教育上の目的もありました。

石上：夕張については全く知らなかったんです。全然知識がなくて、しかもまわりは先輩ばかりで、きっといろんなことを知っているのではと、ずっと緊張していました。

川村：今回の取り組みは、学部を越えて、さらに学年も1年生から4年生まで。石上さんは1人だけ1年生で、高校を出て本当にまだ間もない、大学生活を半期ぐらいしか送っていない。そんな中で参加したという意味では、とてもドキドキだったでしょうね。逆に、先輩の立場としては内藤さんはどうでしたか。

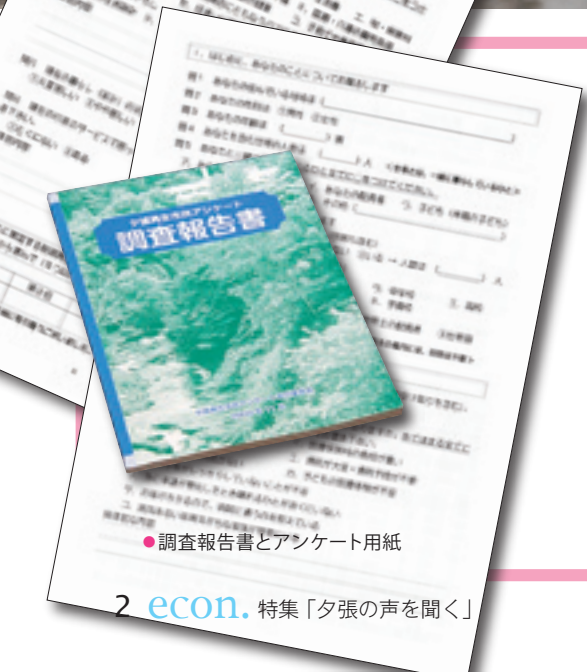
内藤 泰葉さん
経済学科2年
川村ゼミⅠ

内藤：私も夕張についてはほとんど知らないという状態で、財政破綻した町というぐらいの認識しかありませんでした。もちろん事前学習を行ったので、ある程度の知識は蓄えられたんですけれど、でも本当に、その前までは何も知らない状態でした。

川村：確かに、私たちの研究テーマである雇用、労働についての話はある程度できても、夕張というこの地域の経済や医療、教育の問題などを把握して、どう改善していくかを考えるのは、大変だったでしょう。その点、3年生の野々川さんは、調査なども経験しているとはいえ、それでもやっぱり今年はかなりハードでしょうね。

経済学部
川村 雅則准教授

野々川：そうですね。後輩から、今年も夕張に行くという話を聞いて、しかも去年が2泊3日の期間だったのに対して、「1週間つめ込まれるらしいんですよ」っていう話しを聞いて、ずいぶんとハードだなって思う反面、すごく楽しそうだったので、うらやましくて。それで、私も、何かいい経験ができればと思って2年連続で参加しました。ただ、やはり2年生のときに経験した2泊3日と1週間とでは全く違いました。しか



●調査報告書とアンケート用紙

＊調査報告書

「はじめに―問題意識等」より――――川村雅則准教授

私のゼミナールでは、2004年から毎年、夕張で、本学の「地域研修」授業を実施している。具体的には、市役所・ハローワーク・商工会議所など関係機関を訪れ、夕張（旧産炭地）の歴史や地域の直面している問題について話を聞いたり、地域住民や小零細事業者から生活・暮らしの実態や事業経営に関する実態などを聞き取ったりあるいはアンケート調査活動などを行ってきた。その途中で夕張が財政再建団体入りするという事態に直面したが、引き続き夕張入りし、小規模ながらも調査活動を行ってきた。そのご縁で、今回の調査研究事業の依頼があった。

私たちは、財政学や行政学を専攻するものではない。とはいえ、私たちが実施しているフィールドワークの経験を役立てて、夕張に何か恩返しができればとお引き受けすることにした。予想を上回る夕張の人口減少等に示されるとおり、私たちも、夕張でのそれまでの調査活動等を通じて、現行の再建計画は、果たして夕張を再生させることが可能な内容なのか強い疑問を感じていたし、全国でも最高の住民負担で最低の行政サービスを強いられている夕張市民の暮らしの実態を明らかにすることは、必要な作業であると考えた。

夕張再生市民アンケート調査報告書　2009年11月　夕張再生市民アンケート実行委員会発行

も、調査の内容についても、去年の自営業調査では、自営業を営んでいる方々から、事業経営の厳しさなどを中心にお話を聞かせていただいた、それこそ、まだ私たちのゼミの研究テーマとも重なっていましたが、今年は、本当に幅広い内容のお話を聞きましたし、家に上がりこんでお話を聞くという体験がとても貴重でした。

川村：聞き取り調査ってとても大変なんで

2008年の地域研修（夕張市）

2008年の地域研修（夕張市）

すよ。聞こうとしている、お仕事や医療・介護、あるいは生活全般についての知識そのものが聞く側になければならない。その上に、聞き取り調査という手法をマスターしていなければならない。

石上：そうですね。最初はあまり喋ってもらえなくて。

どう質問したら回答しやすいかがわかっていなかったんですね。何度かやったけど難しかったです。それで、先輩を真似てなんとか頑張りました。

石上 千里さん
経済学科1年
浅妻基礎ゼミ

川村：ここが大事なところなんですよ。つまり、先輩の姿を見てね、すごいなあと真似をしようとする。それが後輩の成長につながると思う。逆を言うと先輩は後輩のお手本になろうと頑張る、相乗効果ですよね。そういう意味では、学年さらには学部も混ぜてゼミを行うことの意義を感じましたね、今回の調査では。30数人の学生と教職員が参加しましたのでね。さて、話しを変えて、今度は、聞き取り調査を通じて感じたことや、経験したことなどを教えてもらえますか。私がお会いしたケースでは、例えば老老介護のケースがありましたね。しかも、奥さんに介護が必要なんですが、お金かかるからと介護保険を使っておられなかった。あとは、雪かきの大変さが縷々語られたのが印象に残っています。高齢の単身女性のケースです。私が調査で思ったのは、暮らしを支えている様々な条件が、少しずつ、少しずつ蝕まれていっている事実。そういう実態をきちんと把握して必要な政策を提起したいと思って調査をしました。みなさんの方ではどうでした？

野々川：ある団地に行ったとき、ちょうど町内会のお年寄りの会のような会合が会館でひらかれていたんですよ。それで、まあまずはあがっていきなさいって言われて、昼ごはんまでごちそうになって。その後も、どこから来たの？年齢はいくつ？大学生は偉いね、っていう世間話で。調査表もほっぽりだして、くだけた感じで、「実際、夕張はどうなんですか。財政破綻で生活が苦しいという話は新聞などでよく目にするんですが、こちらの団地のみなさんはどうなんですかって」っていう感じでお話ができました。そのとき、多くのみなさんから言われたのが、うぅん、まあこんなもんでしょっていう感じの回答だったんですよ。この地域にずっと長く住んでいるけど、大変もたかが知れているし、まあこれぐらいで一家やっていける。なんとか生活はしていけているから問題ないよっていう感じで。そのとき思ったのは、私たちは外から来ている人間なので、表向き、大変だ大変だとはすぐには言えないかなということ。あとは、みなさん団地内のことを本当にいろいろ詳しく把握されているんですね。例えば、「あそこのおじいちゃんは今もうこの時間で薬を飲んだら帰っちゃう。でもあそこの人なら町内会のことについてこれこれは詳しいよ」っていう感じで、一つの団地の中でのコミュニティというものを感じたんですよ。世間では孤独死の問題が深刻ですが、こうしたつながりの強い団地ではそういう問題も防げるのかなって、

野々川 華奈さん
地域経済学科３年
川村ゼミⅡ

夕張問題ABC

地域研修を履修しようと考えている板橋君。よくニュースで話題になる夕張市の問題をゼミの西浦先生に聞きました。

板橋君（以下、板橋）：僕が高校生の時に、よく夕張市がテレビに取り上げられていたのを覚えています。

西浦先生（以下、西浦）：財政再建団体になることが決まって、成人祭が開けなくなるかもっていうことで、ワイドショーで大きく取り上げられたね。みのもんたも来た。

板橋：財政再建団体になるというのは、民間企業でいう倒産みたいなものですか？

西浦：そうだね。ただ民間企業と地方自治体では、いろいろとルールが違うんだ。

板橋：どう違うんですか?

西浦：民間企業だと支払いができなくなったり、借りたお金を返せなくなったらアウトだけど、自治体は赤字の額が一定規模に達したら財政再建団体になるんだ。

板橋：財政再建団体になるとどうなるんですか?潰れることもあるのでしょうか?

西浦：自治体は、学校やゴミ収集、道路の維持管理など、僕らの生活や企業の活動に欠かせない役割を担っている。だから簡単に潰すというわけにはいかない。

確信ではないんですが、そういう印象は受けました。

川村：ここも大事なところです。つまり、地域に学生が受け入れられて、じっくりお話を聞くことってすごく大事な経験なんですね。今回も1週間という期間で、学生が地域に受け入れられ、逆に励まされて帰ってくる。そのことが次の勉強へと向かわせることになる。非常に良い経験をしたと思います。

内藤：そうですね、私も野々川さんと一緒に調査していて、いまの事をすごくしみじみと思いました。あるお宅を訪ねたとき、雨が降っていて、入りなさいって家にあげてもらったんです。すごく床がきしんでいて、普通にじゃ歩けないぐらい傾いていて、ほんとに老朽化が進んでいる家だったんですけど、そこは70代のご夫婦と息子さんがひとりの、3人で暮らしていたんですよ。足がとても悪いお母さんにしたら床が傾いていてすごく不便だなって感じました。

川村：自宅にあがらせていただくことの意義を感じさせる話しの内容でしたね、今のは。つまり、調査研究において対象者の自宅にあがらせていただくのは、交流という意味でももちろんのこと、そこでの暮らしの実態をまさに眼で見るっていう点でもとても大事なことなんです。そういう意味でも実は訪問調査ってホントに大事なことなんだよね。来てもらって話を聞くっていう方法もあるけれども、その人の暮らしをトータルに把握しようと思ったら、やはりお邪魔することが大事。

石上：私が印象に残っているのは、40代ぐらいの娘さんが、1人で、ご両親とお姉さんの介護をしている家庭を訪問したときのことです。まずドア開けたら、その方が泣かれていて。あ、これはまずいかなと思って、「すいません、帰ります」って、帰ろうと思ったんですけど、「いえ、話を聞いてもらったほうがすごく楽になるから聞いて欲しい」って言われて、家にあがらせていただいたんです。そしたら、入院されているお父さんの体調が急に悪化してそれでずっと泣いて暮らしているということで。もう調査どころじゃなくて、それこそ、

ずっとその方の話を聞くだけで。それにしても3人の介護を1人で担当するというそのご苦労は、本当にすごかったです。

川村：うーんなるほどね。いまのお話を聞いて、調査の限界の検証の必要性をふと感じました。というのは、調査で市民の暮らしの大変さを明らかにしたと思いながらも、じつはこんなケースもありました。親を介護している一人息子さんのご自宅を訪問した際、ちょうど介護の最中だったので、「ごめんね」って言われて、調査はできなかったんですよ。そういう方々は少なくないのかもしれない。つまり、我々がお会いできたのは全員じゃないですよね。もしかしたら、生活が大変な人ほどこういう調査から漏れている可能性があるんだよね。その意味ではまだまだ調査の方法とかも含めて考えなきゃいけないのかな。自分達はどこまで明らかにし得たんだろうっていうことの厳しい検証が必要かもしれない。ところで、今回のような現地での聞き取り調査も含めて、大学生活では、学生にこうしたいろいろな経験の機会をつくってあげることが大事だと思っているんですが、高校での勉強と大学での勉強の違いとか、もし何か感じたことがあれば。

石上：高校では現地調査などはやらないので、今回、実際に夕張に行く経験は、正直いって驚きでした。

川村：大変だったと思うけど、本当に良い経験をしてもらったかなって思っています。

内藤：大学で何をやるのか長い間悩んでいたのですが、実際大学に入って勉強をしてみたら、違いました。そして、どの大学に入るかじゃない。自分がやりたいことを大学で見つけられるかがすごく大事だとあらためて気づいた。その意味では、この大学に入って、素晴らしい先生方に会えて、これをやっていこうっていうのを見つけることが出来たかなってすごく思います。

川村：紙面1頁分を埋めるぐらいの熱い語りでした（笑）。1年生から2年生になる時に楽なゼミという基準で選んでいる学生もいるみたいですね。でも、はじめはそれでいいかもしれないけど、2年間それだと逆に苦痛だと私は思う。そういう意味では、私たちの取り組みは、文字通りカタチとして残ったよね。いろいろなところで今これ

板橋：じゃあ、借金をまけてもらえるとか?

西浦：そういう仕組みもないんだ。とにかく国の管理下で、赤字をゼロにしなくちゃいけない。そのために財政支出をぎりぎりまで削るよう求められるし、住民負担も引き上げることが求められる。

板橋：大変ですね！　でもそもそもは夕張市がムダ遣いをしたから、赤字が膨らんだんですよね?自己責任!?

西浦：結論を急がないで、歴史を振り返ってみよう。夕張市は、1990年頃にはすでに財政破たんも同然だったんだよ。1990年は「炭都」と呼ばれた夕張市から、すべての炭鉱の灯が消えた年でもある。

板橋：僕は夕張というと「メロンと映画祭のマチ」というイメージですが…。

西浦：国の政策で炭鉱閉山が進められて、夕張市は急激な経済衰退と人口流出に直面した。そんな中で当時のカリスマ市長が、観光事業で地域衰退を必死に食い止めようとしたんだ。市の借金は瞬く間に膨らんで、借金返済が財政を圧迫した。

板橋：そして1990年頃には財政破たんも同然になったわけですね。

西浦：その通り。でもそのときは財政再建団体にならなかったんだよ。

板橋：って、いいんですか?

西浦：地方財政制度の抜け穴を使って、赤字が表に出ないようにしたんだ。赤字になれば、これまで取り組んできた観光事業も止めさせられることになるからね。国も黙認してたと言われている。

板橋：そしてどんどん赤字が膨らむことに

［次ページにつづく］

（*報告書）が使われている。具体的な地域貢献をみなさんは達成したんだよ。

西村：夕張市は今、財政再生計画を作っているんですよね。巨大な借金を返しながら、ただ借金返すだけじゃなくて、これからどんな町をつくるかを考えようってことで、みなさんの調査も計画作りに生かされたと聞いています。皆さんから、夕張にどんな町になって欲しいと思うことはありますか。お年寄りが多い町なので、人口は次第に減っていきます。いろんなお宅をまわったと思うんですが、例えば、計画案には、古い住宅を、空家になっているところも多いので、一つの地区に集めていこうという構想があります。それは買い物が便利になるとか、いい面もあると思うんだけれど、ただ環境が変わるとね、健康面で影響がでたり、近所付き合いが変わってしまうといった心配もあります。そういったことや、どんなことでもいいんだけど、今後、夕張はどういうまちづくりを進めていけばいいのだろう？皆さんの視点から、感じたことがあれば聞かせて下さい。

野々川：まだ具体的ではないし、夕張の実態をまだまだきちんと把握できていないんですが、先ほど言ったように、今回の調査では、夕張のコミュニティの強さを感じたんですよ。それってやっぱり、旧産炭地の助け合いの精神みたいなこともあるよって地元の人に教わりました。その意味では、つながりの土台っていうものがきっとその土地には根付いているんだと思うんです。だから、その上の部分ですよね。つまり、その上に何を積み重ねていけばいいのかということで、その具体的な姿はまだよくわからないんです。去年行った時には、先ほどのコンパクトシティの話しもありましたが、他にも、産廃処分場やカジノを誘致して地域を活性化させようという話も聞きました。でも今回行って、それって、夕張の実態とは合ってないんじゃないかなって思ったんです。今の夕張の人のつながりを大事にしながらどんな政策が必要なのか考えるんですけど、まだよくわからないです。

川村：そうだね、そういう市民の連帯感とか信頼感とかをもったコミュニティが存在するわけだから、あとはそれを壊すことのないような計画が必要だよね。いわゆる迷惑施設を引っ張ってきてうんぬんというのはちょっとなじまないように個人的には思う。喧々諤々しながらも、進む方向を自分達で決めていくことが必要なんだろうね。ただそれには、やっぱり国や道の支援が不可欠になってくると思いますが。

内藤：野々川さんが言ったように、コミュニティっていうのか、人とのつながりがすごく重要になってくると思うんですよ。夕張全体で町を作るってことですから、住民同士の結束が強い夕張ならいいまちづくりができるんじゃないかって思ったんですよ。住民と一緒に、市長も一緒になって町作りをしていくっていうのはすごく重要なことだなっていうふうに思いました。

石上：ただ、高齢者の方からは、「夕張再生なんてもういいんだよ」、っていう声も聞かれました。なんか寂しいというか、町をよくしようとみんなが思えるようになればと思いました。

川村：ある意味、道や国から締め付けられている側面があって、なかなか希望がもてないんでしょうね。夕張が今後どうなっていくのか心配の声は私もよく聞きました。道や国の支援が無ければ投げやりになるその気持はよくわかるな。だからこそ、本当に希望をもってそこで暮らしていけるようにするための再生計画なり、道や国の支援が必要だと思います。

西村：これからも皆さんと一緒に、夕張の再生を見守り、様々な形で支援できればと思います。今日はありがとうございました。

西村先生が司会を務めた夕張まちづくり集談会（2009年10月4日　夕張市）

なったということですね。

西浦：さすが板橋君。赤字が膨らんだ歴史的経緯を見ると、複雑な政治的・経済的要因が絡んでいて、短絡的に夕張が悪いと決めつけられないと僕は思うね。

板橋：何だか、サスペンス・ドラマみたいですね。夕張は今、どうなってるのですか?

西浦：必死に赤字解消に取り組んでいるよ。ただ市民や市職員の我慢も限界に近くて、「夕張市には住み続けられない」とマチを出ていく人も、あとを絶たないよ。

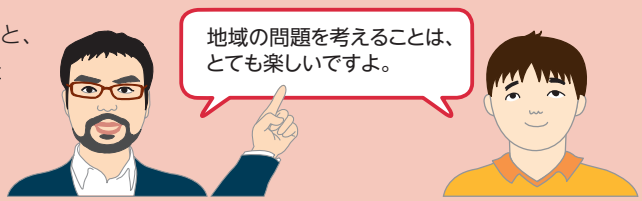
板橋：人が出ていけば、ますます、財政再建は難しくなるんじゃないですか?

西浦：そうなんだ。夕張市は今度、新しい法律に基づく「財政再生団体」になるんだけど、それに合わせて、市民が希望を持って住み続けられるように、計画を作り直しているよ。

板橋：それに役立てようと、アンケート調査を行ったんですね。新しい計画は市民に希望を与えるものになってほしいですね！

西浦：本当だね。「財政の再生」が、本当の意味で「地域の再生」につながるものになってほしいね。

板橋：今日はありがとうございました。



日常から世界を視る、そして考える。

グアテマラとニセコ・夕張、環境問題と経済成長、同時代性のさなかに私たちの日常がある。経済学部の報告会、講演会を伝える。

特別講演会 ［平成 21 年 10 月 20 日］

「アジア経済統合と日本の EPA 戦略」

田辺 靖雄氏●外務省経済局審議官

世界経済はグローバル化の渦中にあり、アジアでも経済統合が深化・拡大を遂げている。アジア経済統合の一翼を担っている日本企業は、アジア域内で生産分業ネットワークを構築している。そうした日本企業の活動をバックアップし、日本経済の持続的な成長につなげるために、日本政府は積極的にEPA（経済連携協定）戦略を展開している。

EPAは、特定の国・地域との間で、関税等の貿易障壁を撤廃するFTA（自由貿易協定）に、人の移動や投資自由化の推進、競争や知的財産のルールの調和等を含めた広範な取り決めである。

田辺氏は、外務省経済局審議官としてEPA戦略の陣頭指揮をとり、

2009年度 地域研修報告会

今や、経済学部の地域経済学科を中心として「名物」となりつつある「地域研修」。本年度も12月5日（土）、12日（土）の2日間にわたり、その合同報告会が行われた。25のゼミが3つの会場にわかれ、それぞれの成果を報告。質疑応答も活発に行われ、熱のこもった報告会となった。

研修テーマは多岐にわたり、研修場所も道内に限らずさまざま。「倶知安町の観光政策」「夕張市の財政再建問題」「幌加内町の韓国・朝鮮人強制労働の歴史」「札幌市内のフェアトレード商品と有機野菜取扱店について」「京都・神戸の地域メディアの実態と戦略」などなど。日本の「地域」がかかえる諸問題を幅広くカバーするものとなっていた。

たとえば、経済学部、小田ゼミの報告では、旭山動物園が「日本一の動物園に成り得た理由」を、1.全てを地域、環境に還元するという思い、2.地域と共に、動物と共に、という共生の思想、3.自然への循環という変わらぬ目的意識と行動、が重要であったと分析。「何のため」という目的の具体化が大切、とまとめた。

研修に向けての事前準備に始まり、研修本番、そして、成果取りまとめと今回の報告会。この「地域研修」の1サイクル、たしかにまじめに取り組めば取り組むほど、時間も労力もかかる。しかし、その分、得るものも大きい。テキトーに取り組めば、「2単位」以外に得るものはない。それは、「地域研修」に参加した学生なら、よくわかるはず。

そもそも、この「地域研修」を目的に入学してくる学生も少なくないとか。「地域研修」で得た「何か」を携え、卒業後もその経験を生かし、一人でも多くの学生が北海道に、日本に、世界に活躍の場を見つけてくれることを信じている。

地域社会論 II 特別講義／経済学部特別講演会 ［平成 21 年 11 月 14 日］

「ニセコは、ひとつ！」片山 健也氏●ニセコ町長

地域社会論II（担当・内田和浩教授）では、北海道内の自治体における具体的な地域づくりの事例を取り上げ、そこでの地域住民及び自治体職員の具体的な地域づくりの主体形成過程を学んでいる。講義の中で取り上げるニセコ町での地域づくりの実際について、2009年10月8日に就任したばかりの片山健也町長をお招きし、選挙で掲げた「徹底した情報共有による公正な町政」「町民の視点に立ち、コスト意識を持ったスピード感ある町政」「温かな心をはぐくみ、共感を基にした思いやりの町政」とは具体的にどのようなものか直接お話しいただいた。

1994年、全国最年少町長（当時）としてスタートした逢坂誠二町政は、「情報共有」と「住民主体の町政」の実現を掲げてさまざまな先駆的な取り組みを行い、2000年には「ニセコ町づくり基本条例」を制定し、片山氏も職員の一人として協働のまちづくりを推進する中心的な役割を担ってきた。

2001年からは「即時検索性、他者検索性、私物化の禁止」を原則とする文書の「行政ナレッジ・ファイリング」というファイリングシステムを先駆的に導入している。これは世界標準規格(ISO)のモデルともされているもので、ニセコ町ではすべての書類は30秒以内に閲覧できる。これは「情報は主権者たる住民のものである」ことを実現させると同時に、職員のコスト意識の向上と、何よりもまちづくりには欠かせない住民と職員との共有意識を育てることになった。進んでどんどん住民の中に入り込んで行く、積極的な姿勢に転換していったのだ。

民間企業からニセコ町職員に転身、30年の経験を基に、「主権者は住民」であるという信念を持ちながらまちづくりに関わってきた片山氏から、住民自治のあるべき姿とそれを推進して行こうとする行政職員の熱意と気概を学んだ。

これまでにベトナムやフィリピンをはじめ多数のEPAを立ち上げてきた。理論・実践の両面でEPAに精通した田辺氏は講演で、アジア経済統合の現状やEPAの経済効果等を様々なデータを用いて解説、その上でEPA戦略の意義を力説した。そして、今後の課題として「アジア経済統合への意識向上や、既存EPAの改善、通貨やエネルギー部門を含めた多層的・多角的な取り組み」などを挙げた。

FTA・EPAが世界的な潮流となり、それへの対応が一国の成長戦略や外交政策にも多大な影響を及ぼす現代にあって、田辺氏の講演内容は非常に意義深いものであった。

特別講演会　[平成21年12月17日]

「市民がつくるグリーンニューディール」

鈴木 亨氏 ● NPO法人北海道グリーンファンド理事長・事務局長

1929年に始まった世界恐慌の克服のためにアメリカで展開された、市場と政府の関係を大きくかえる大規模な公共政策はニューデール政策と呼ばれたが、この名に由来するグリーンニューデールが、現在の世界同時不況・気候変動・原油価格高騰の3大危機解決のために提言され、世界各国で検討、推進がなされている。

我が国においても様々な取り組がされている中で、NPO法人北海道グリーンファンドの鈴木亨氏をお招きして、環境と経済成長という視点から自然エネルギーをめぐる最新の取り組みを学び、将来の展望を講演していただいた。

化石燃料依存のエネルギー政策が大きな曲がり角に来ている一方で、風力や太陽光、木質バイオマスなど自然エネルギーによる発電方式が注目を浴びている。特に、市民自身がファンドをつくり、自然エネルギーの普及をすすめる運動は、単に温室効果ガス削減だけではなく、雇用創出などの経済波及効果をもたらす。

環境と経済成長という対立軸を両立に変えて行くために、身近なところから市民レベルで参加できる事業が求められている。北海道における風力発電量は年間約25万キロワットだが、面積、人口規模などで似ているデンマークでは320万キロワットの風力発電量があり、風力発電風車の製作会社が多くの雇用も生み出し、自然エネルギーで社会をまかなっていく先進的な取り組みが進んでいる。デンマーク、ドイツなどの事例をあげながら北海道におけるその可能性が語られた。

特別講演会　[平成21年12月9日]

「先住民族女性からみたグアテマラの現在」

マリアナ・チュタ氏、アイデー・ロペス氏

グアテマラからマリアナ・チュタさんとアイデー・ロペスさんをお招きして先住民族の女性の目を通してみたグアテマラの内戦の歴史と現在について紹介していただいた。

お二人は「戦時性暴力の被害者から変革の主体へ」プロジェクトの一員として来日したが、このプロジェクトは同国のヨランダ・アギラルさんによって始められた。アラギルさんは、2000年に東京で開催された「女性国際戦犯法廷」の「国際公聴会」に参加し、女性達が戦時性暴力の恐怖を克服し尊厳を取り戻そうとする姿を目の当たりにした経験から、グアテマラでも同様のプロジェクトを行おうと決意。そして誕生したのが、女性のエンパワーメントとメンタルヘルスを組み合わせた同プロジェクトだ。

農地解放運動が発端となり、ゲリラ化した農民運動だけではなく全ての社会的運動が弾圧され、1960年から36年間にも及んだ国家権力の暴力的な圧政に、国民1800万人のうち20万人もが虐殺され、440もの村が消滅するという内戦状態に陥った。先住民族であるマヤ文化の破壊、「焦土作戦」による集落コミュニティの破壊、女性に対する性暴力など暴力の犠牲になった人々の傷は現在も癒されることなく深い傷を抱えたままだ。

マリアナさんの夫は無実の罪で疑われ、軍によって連れ去られ、未だに行方不明のままであるが、女性たちで共同のトウモロコシ栽培を行うなどの協同組合を組織し、自立の道を歩んでいる。アイデーさんは生まれてすぐに家族と亡命生活を強いられながらも、現在は心理学者としてプロジェクトにメンタルヘルス担当として参加、ともにこの犠牲者であるが平和的なグアテマラへの再生に取り組んでいる。

グアテマラの悲惨な内戦の歴史から自立と平和を目指す力強い女性達の活動のお話は、「私たちにとって『人間らしく生きる』とはどういうことか」ということを考えさせてくれた。

［OB訪問］

働きマン 4

◀セイコーマート時代に開発を担当したリテールブランド商品のペットボトル飲料と、ハセスト名物「やきとり弁当」を持って。

汗かいて走っている連帯感、今も変わらずに

全日本学生選手権にて（手前のパイロットが佐藤さん）

佐藤 邦夫さん

さとう　くにお

大学時代は、ボブスレーのパイロットとして部活動に打ち込んだ佐藤邦夫さん。地場のコンビニエンスストアとして、全道に900以上の店舗を展開するセイコーマートへ入社、現在は関連会社で「やきとり弁当」が有名な函館市の異色コンビニ「ハセスト」ことハセガワストア（本社函館市）を牽引する代表取締役として活躍する。

ボブスレー部で明け暮れた大学生活

大学生活を「エンジョイしよう」と思い、北海道なら北海学園という、深い動機はなく身近な大学受験をしたという佐藤さん。それでも高校生ながらに、消去法ではあるが卒業した後実務的に活きる部分があるのではないかと経済学部を選んだ。

「今の仕事に活きていますね。もっと勉強しておけば良かったな」と少し後悔を重ねて、現在の職務に密接につながっているという。

入学当初からボブスレー部に入部、部活動中心の学生生活が続いた。「入学式の時に腕を引っ張られ、熱心に勧誘してきた先輩がいまして、そのまま入部」。当時ボブスレー部があったのは本学のほかに全国でも3大学だけというマイナー競技。歴史をたどれば、初代主将であった市橋善行さんが始め、市橋さんは1972年の札幌オリンピックにまで出場、由緒ある部だ。学生時代は毎年1月初旬からオリンピックコースのあった手稲山に入り、2月中旬くらいまでその間びっしり練習と大会の日々が続いた。全日本選手権、インカレと、常に4校4､50人で競い合っていた。成績は2人乗りで6位に入賞したのが最高位、2人乗りの後ろはブレーカー、佐藤さんは前で操縦、パイロットという。ひっくり返る危険性が多く、相当な恐怖感を伴う。ボブスレーは氷の壁を時速100キロ近く出るようなことも、体感はもっとあり、疾走するその姿は氷上のF1レースと称される。佐藤さんも手の筋を何度か切ったという。1ヶ月ほどしかない競技シーズンで「ひたすら体力トレーニング、とにかく走っていました。でも楽しかったんでしょうね。アルバイトやって、クラブやって、テスト期間だけは図書館にこもってひたすら試験勉強でした。体育会の他サークルの友達が多く、仲間付き合い、連帯感があり楽しかった。汗かいて走っている連帯感。河原行ったり、走ったり。大学生活の中心は部活動でした」

「ゼミは途中で学長になられた田中修先生でした。威張って言えませんがあまりまじめに学生やっていませんでしたね。勉強、ゼミにも熱心に取り組んだ記憶はないのです、格好悪いけど」と言いながらも仲間と過ごした当時の学生時代を懐かしそうに語る。

1年生時のボブスレー部（'81卒業アルバムより、後列右から4人目が佐藤さん）

大学での勉強が仕事の中で活き始める

あまりにも部活動中心の生活だった佐藤さん、卒業までに5年間を費やす結果となるが、その後の就職については「正直、展望、夢、ビジョンもなかった。業界の研究もしなかった。何をしたいのかってわからなかった」ボブスレー部も引退し、漠然とした日々を送っていた。

「5年目4年生の5月くらいでしょうか。暇持て余して外を走っていて、どうしようかなと考えて」当時の大学生にとって人気職業だった広告代理店などの会社訪問もしたそうだ。そんな時に「就職情報を見ていたらセイコーマートが出ていて、コンビニって何かなと。当時コンビニはあまりありませんでしたから。学生時代コンビニ弁当売っているなんてあり得ませんでした。会社説明会を受けたら、聞いたことがないこと、先に向けて面白そうだなと」採用試験でグループ面接を受けた。「ほかの人からは業界用語いっぱい出てくるのにわからなくて、でも採用されて幸運でした」

セイコーマート入社後は、学生時代とは打って変わって勉強の日々となる。「講義の中で聞いたことが、会社入るとけっこう出てきて面白いもんだなと思いました。学校入ったときは、大学の勉強なんて将来生きないよ、あんな勉強しても関係ないじゃない。卒業の資格欲しいから、まじめに過ごして卒業しよう、と思っていたんですよ。卒業したら、あれ、これ聞いたことあるな、というのがいっぱい出てくる訳ですよ。あ、こういうことかというのが、経済学部で勉強したことが、なるほどな、これはちゃんと勉強しておけば良かった。セイコーマートに入社したがゆえに、実務的なことと関わったからでしょうか」高校時代に「実務的に活きるかと」選択した経済学部への志望動機が実を結んだ瞬間であり、勉強の大事さにもあらためて思い知ることとなった。

「うちの会社（セイコーマート）は、教育に対しての投資はかけてもらえる。内外部のセミナー、通信教育の受講もやる気があればどんどん受けさせてもらえる。そういった教育の場があったり、理論を活かせる場が多く与えられたことを会社に感謝していますね。経済学部で勉強していたことが下地にあったことで敏感に反応できた。その時意味わからず聞いた単語の意味が、会社では理屈、現実がついてくる。初めて理解できた。もっと勉強しておけば良かった。今できることなら、また大学に勉強に行きたいですね」

「先輩から教わったこと、仲間と出会ったことを大事に、経験するということを恐れずに」。

佐藤さんが大学時代を振り返る時、今でも大切に思うことだという。

ハセガワストア本部にて

profile

1961年　札幌市生まれ
1980年　札幌市立藻岩高校卒
　　本学経済学部経営学科入学
1985年　本学卒、セイコーマート入社
1994年　リテールブランドなどの商品開発を担当
2008年　ハセガワストア専務取締役に就任
2010年　2月、ハセガワストア代表取締役に就任

【私の履歴書】

内田 和浩

うちだ　かずひろ

経済学部地域経済学科教授
[地域社会学・社会教育学]

1983年3月、卒業式後の謝恩会で、故・島崎稔先生を囲んで学友たちと

経歴

1960年　室蘭市に生まれる
1979年　苫小牧東高校卒業
1983年　中央大学文学部哲学科社会学専攻卒業
1983年　神奈川県相模原市教育委員会
　　(社会教育主事として公民館勤務)91年まで
1995年　北海道大学大学院教育学研究科博士後期課程単位取得退学
1995年　北星学園女子短期大学専任講師/助教授
2000年　北海道大学より、博士(教育学)号を授与
2000年　北海道教育大学生涯学習教育研究センター助教授/教授
2008年　北海学園大学経済学部教授、現在に至る

主な研究業績・著書

『「自治体社会教育」の創造』(北樹出版)2001年6月*単著
『21世紀の生涯学習関連職員の展望』(多賀出版)2002年2月*共著
『都市公民館の再生・三多摩テーゼからの自己革新』(北樹出版)2002年2月*共著
『公民館実践と「地域をつくる学び」』(北樹出版)2002年6月*共著
『知を拓く学びを創る-新・社会教育入門』(つなん出版)2004年5月*共著
『社会教育-自治と協同的創造の教育学』(国土社)2006年5月*共著
『学びあうコミュニティを培う』(東洋館出版)2009年9月*共著

“出会い”が私を支え成長させてくれた

学生時代

室蘭生まれですが小・中・高校は苫小牧で過ごし、大自然の中でのびのびと育ちました。大学進学の際は学部選びに迷いましたが、受験雑誌などを調べやっと見つけたのが当時「新しい学問」と言われていた社会学でした。

中央大学に入学し、「東京」での大学生活が始まりました。社会学専攻には個性的な学生が多く、入学早々から自主ゼミをつくり「社会問題を科学する!」と熱い議論を闘わせたものです。サークルは史蹟研究会に入り、毎週2回の文献でのゼミ学習、京都・奈良等への合宿研修、鎌倉・川越等への月例見学会、大学祭で活動発表会等など、活発な活動を四年間行っていました。学生生活を謳歌し、生涯の友と“出会い”がありました。

また、社会教育主事課程で島田修一先生と“出会い”、「地域を創る大人の学び」としての社会教育に強く興味を持つようになっていきました。社会学専攻の演習(地域社会学ゼミ)では、故・島崎稔先生と“出会い”、「川崎調査」にも参加させてもらうとともに、「地域社会の形成と社会教育の役割」をテーマとする卒業論文に取り組みました。

このように、大学での仲間や恩師との“出会い”によって、仲間同士で学びあうことのすばらしさや、社会教育学と地域社会学の基礎を学んだ私は、「地域を創る大人の学び」を支援する自治体の社会教育主事になりたいと、強く思うようになっていったのです。

相模原市の公民館職員時代

社会教育演習で訪ねた相模原市に就職が決まり、市内の公民館に社会教育主事として勤務することになりました。橋本公民館では、最初に「親と子の読書教室」を担当。準備委員のお母さんたちは、新米職員の未熟な考え方を見事に打ち砕いてくれました。その時の“出会い”は、事業化の際の状況分析の大切さや学習者

1985年頃、橋本公民館主催「郷土史見学会」にて

主体の実生活に即する学習の本質を教えてくれたのです。麻溝公民館では、農村地域の地域性として「利用者が少ない」と嘆くのではなく、職員自身がいかに多くの地域住民と出会うか、つまり職員がどれだけ地域を知り、地域に根ざすのか。地域住民同士がいかにして対等な人間同士として出会うのか。その“出会い”を公民館がいかにして設定し、学習活動として組織し支援していくことができるか。地域住民の皆さんとの“出会い”を通じて学んでいきました。

やがて、実際の地域社会教育実践の中から学んできたことが、理論的にどういう意味があるのかを確認したいという気持ちが強くなっていきました。それは、日本社会教育学会等での研究発表へと発展し、「大学院で研究したい!」と強く望むようになっていきました。こうして30才の時、思いきって仕事を辞め、故郷・北海道での学究生活に入る決意をしたのです。先の見えない無謀な挑戦を支えてくれた妻との“出会い”も公民館でした。相模原での多くの“出会い”が、私を後押ししてくれたのです。

北海道大学大学院時代

社会教育研究室では、山田定市先生、鈴木敏正先生、宮崎隆志先生、当時非常勤で大学院に来られていた故・美土路達雄先生、そして医療短大におられた高倉嗣昌先生との“出会い”がありました。八雲町での修士論文調査では、研究室総出で酪農集落への個別農家聞き取り調査を手伝っていただき、地域調査の醍醐味と集団的研究の素晴らしさを実感でき、「実践的研究者」として歩み出すことができました。

大学教員になってから

初めて専任教員としての職を得たのは、北星学園女子短期大学でした。やがて、自治体職員や4年生大学へ編入して社会教育を勉強したいと希望する学生も増え、教師として学生たちの成長によって気づかされる“出会い”がありました。

そんな時、北海道教育大学に新しく生涯学習教育研究センターができ、旭川校生涯教育課程も担当できる教員を探しており、「社会教育主事となる学生たちと“出会い”たい!」との強い思いから転任を決意しました。ここでは、社会教育ゼミ5期26人の卒業生を送り出しましたが、19人が教員を含む自治体職員となり、うち6人が社会教育主事になっています。しかし、残念ながら生涯教育課程は廃止となり、社会教育ゼミも2008年度卒業生で最後となりました。

2008年4月。北海学園大学経済学部でお世話になることになりました。学生時代に学んだ社会教育学と地域社会学とを両方とも担当できることに、何か“出会い”の運命的なものを感じ、新たな“出会い”へ向けての決意を強くしたところです。

“出会い”は待っていてもやってこない!

私はまもなく50才になりますが、これまでの“出会い”に支えられて今を生きています。そして、これからも“出会い”を大切にしながら生きていこうと思っています。

皆さんも、ぜひ学生時代に多くの師と関わり学問や生き方を学んでください。多くの友と交流してください。その“出会い”は、きっと皆さんの将来への血肉となり財産となるはずです。そして私も、好奇心溢れる学生との“出会い”を楽しみにしています。

地域研修Ⅱ(芽室町)にて、ゼミナールⅡの学生たちと

プレゼン大会開催される

平成21年12月12日（土）、13日（日）に第1回北海学園大学経済学部プレゼン大会が経済学部ゼミナール協議会の主催で開催されました。このプレゼン大会は、来年度に行われる「第54期 東北・北海道学生経済ゼミナール（通称：北ブロ）」の大会が、北海学園大学で開催されることにあわせ、企画されたものです。

もともと1部地域経済学科には「地域研修合同報告会」という「地域研修」での成果を発表する機会があったものの、そのほかの経済学科のゼミ、基礎ゼミ、2部地域経済学科のゼミには、そのような機会がありませんでした。このプレゼン大会が開催されることにより、経済学部すべてのゼミに日頃のゼミ活動の成果を発表する「場」ができたことになります。

当日は、経営学部のゼミの参加も含め、全部で24のプレゼンが行われました。それぞれのプレゼンについて、担当の教員各3名が発表内容とプレゼン技術を審査。１位から３位までが発表されました。

文系学部を卒業した学生の場合、就職先でも多かれ少なかれ、仕事の中でプレゼンを行う機会はあるはず。内容や技術より「慣れ」が重要かも？ 来年度の北ブロ・北海学園大学大会を含め、第2回大会のさらなる盛り上がりに期待が集まります。

伝統のインゼミ！ in 関西大学「報告記」

1. インゼミとは

みなさんは「日本学生経済ゼミナール大会（以下、『インゼミ』）」をご存知でしょうか。インゼミとは、1953年から続く長い伝統を持つ全国最大の学術論文・討論大会のことで、全国の100校前後の大学で経済学・経営学・商学を学ぶ学生によって組織された学術団体によって運営されています。

インゼミでは、全国から集まった学生たちが研究テーマごとの分科会にわかれ、日々のゼミナール活動などで研究・調査をした成果をまとめた論文を基に討論がなされています。

平成21年度の全国大会は関西大学で12月に開催され、全国から1,800人を越える学生が参加し、本学からも川村ゼミ、水野谷ゼミ、平野ゼミ、越後ゼミが参加しました。

2. 勉強→勉強→実態調査→分析→論文→そして全国大会へ

さて、インゼミに参加する学生は大会参加までにどのような準備をしているのでしょうか。まず、参加するほとんどの学生はゼミナールに所属し、研究テーマを決めます。研究テーマが決まればとにかく勉強です。ゼミ教員の指導の下、研究テーマに関連する本を読みあさり、時には実態を把握するために調査活動を行い、その成果を論文にまとめて当日に臨みます。このような日々の勉強の積み重ねがあって当日白熱した議論がなされるのです。

参加した学生からは、「自分たちと同じテーマで勉強している全国の学生と交流が出来て楽しかったし、いい刺激になった」「一年間勉強してきた成果が発揮できた」「自分たちとは違う視点で分析している点から物事を多面的に見ることの大事さを学んだ」などの声が聞かれ、インゼミに参加したことによる充実感や達成感があったと強く感じられました。

充実したキャンパスライフを送りたいと考えているみなさん、インゼミに参加してみてはいかがでしょうか。

参加ゼミ	研究テーマと分科会のその他の大学
川村ゼミA	「非正規雇用−雇用の多様化･流動化」×福岡大学
川村ゼミB	「非正規雇用」×東北学院大学
川村ゼミC	「政策と労働者」×三重大学×中央大学
平野ゼミⅡ	「貧困と労働」×神奈川大学×新潟大学
水野谷ゼミ	「経済統計学の視点からの経済社会問題の現状」×東北学院大学
越後ゼミ	「効果的な禁煙政策を考える」×青山学院大学×関東学院大学

受付風景

分科会風景

分科会風景

就職情報

公務員・教員登録状況

［平成21年度～平成18年度卒業生・全学部］
平成22年1月15日現在

名称		人数			
		21年度	20年度	19年度	18年度
国家公務員Ⅰ種		1	0	4	0
国家公務員Ⅱ種		55	37	33	25
国税専門官		31	29	16	24
裁判所事務官Ⅱ種		13	12	10	3
海上保安官		2	0	0	0
自衛隊幹部候補生		6	4	7	4
自衛隊一般曹候補生		10	13	4	4
北海道職員	上級〈一般行政〉	0	1	2	0
	上級〈技術系〉	2	0	0	0
	中級〈警察行政〉	16	9	16	18
	中級〈小中学校事務〉	3	2	3	0
その他都道府県	上級	0	4	5	0

名称		人数			
		21年度	20年度	19年度	18年度
北海道	警察官（男性）	76	73	89	84
	警察官（女性）	6	7	2	2
警視庁警察官		10	3	12	14
その他警察官		2	7	8	14
札幌市	行政	37	20	14	10
	技術系	5	2	1	1
	学校事務	2	6	1	2
	消防	12	11	10	7
その他市町村		87	66	47	23
その他※		143	92	76	74
小計		519	398	360	309
公立学校教員		22	26	33	23
総計		541	424	393	332

※国立大学法人等職員、入国警備官、刑務官など。

就職部の主な支援活動

- 就職相談・個別面談
- ガイダンス（民間・公務員）
- 面接対策（模擬面接・面接セミナー）
- 履歴書、エントリーシート添削セミナー
- 就職講座（民間・公務員）
- 就職講演会（民間）
- 学内合同説明会
- 業界研究会
- 模擬試験（民間・公務員）
- YG性格検査、就職適正検査（R-CAP）の実施
- インターンシップの斡旋
- 資格取得講座
- 就職ポータルサイトの提供

econ. No.21 2010.冬・春号
発行：北海学園大学経済学部　　制作：（株）ラボット
〒062-8605札幌市豊平区旭町4丁目1-40　TEL:011-841-1161（代表）FAX:011-824-7729
http://www.econ-hgu.jp　北海学園大学エコン 検索　E-mail:admin-ec@econ.hokkai-s-u.ac.jp
PRINTED WITH SOY INK 大豆油インキで印刷しています　R100 古紙配合率100%再生紙を使用しています